

第2章

ソマリアにおけるシアド・バーレ体制とは 何だったのか？

——「崩壊国家」という政治・社会状況を生んだ政治力学をめぐって——

遠藤 貢

要約：

「崩壊国家」としてのソマリアはなぜ生成したのかという問いへの答えを探求するための一環として、本報告は「崩壊国家」という状況に先行して存在していたシアド・バーレ体制を再考するための整理と、若干の検討を行ったものである。シアド・バーレ体制は「出来事」としての「崩壊国家」をある程度説明することはできるが、中期・長期の「過程」を説明するには不十分であるということが暫定的な結論である。

キーワード：

崩壊国家、ソマリア、個人支配

はじめに

ソマリアには、1991年にモハメド・シアド・バーレ (Mohamed Siyaad Barre) 体制が倒れてから国内を実効支配できる政府が存在していない。近年では、こうした状況を指す概念として「破綻国家」がしばしば用いられる。しかし、そ

の内実は多様であり、あいまいな概念装置のもとで議論されてきた感が否めない。ここでは以下で述べるように、ひとまずロトバークの議論に倣い、「弱い国家」(weak state)、「失敗しつつある国家」(failing state)、「失敗国家」(failed state)と峻別した上で、「崩壊国家」(collapsed state)を「失敗国家」の極限的な現象として位置づけておきたい (Rotberg ed. [2004])。

本章の背景には、こうした「崩壊国家」としてのソマリアはなぜ生成したのか、という問題意識がある。この問題は基本的には二つの問題に分けて検討する必要がある。それは第一になぜソマリアは「崩壊国家」と考えられる状況に至ったのかという比較的短期的な「出来事」(event)としての問題と、第二に「崩壊国家」という状況がなぜ15年以上にもわたり継続的に存在しているのかという比較的中期の「過程」(process)としての問題である。そしてこうした基本問題の先に、より長期的な問題として「崩壊国家」という状況はどのようにアフリカの歴史過程の中で意味づけられるべきなのかということがある。これは「崩壊国家」を修復すべき惨劇というネガティブな状況ととらえるのか、発想を転換してアフリカにおける新たな社会秩序や国家の形成というより長期の過程の一部として評価するポジティブな視座を持ち込むのかという問題設定ともかかわる。

無論、本章は上記の作業のすべてを行うことを目指すものではない。上記の課題を今後検討する際の予備的な作業として、ソマリアという「崩壊国家」の生成において、それに先行して存在していたシアド・バーレ体制を整理し、若干の検討を加えることにとどまるものである。ここでの暫定的な見通しは、このシアド・バーレ体制は「出来事」を説明することはできるが、中期・長期の「過程」を説明するにはそれだけでは不十分であるということである。それは、「過程」を説明するためには、「アフリカの角」(Horn of Africa)における歴史的な社会編成の過程、さらにシアド・バーレ体制下でのより詳細な社会変容過程を組み込まなければ、その説明は難しいと考えるからである。そして、シアド・バーレ体制という「個人支配」の一様式自体が、そうした中期・長期のソマリアの歴史の中で改めて再評価される必要が出てくるであろう。その意味で、こ

こでの作業はそのわずかな一歩に過ぎないことを確認しておきたい。

以上の問題意識と暫定的な見通しのもと、本章ではシアド・バーレ体制をひとまず記述して評価を提示するとともに、今後の検討課題を探ることにしたい。

第1節 先行研究

1 「個人支配」研究における四類型

アフリカ研究における「個人支配」(Personal Rule)の概念は、1980年代初頭に上梓されたジャクソンとロスバーグによる研究において提起されたものである(Jackson and Rosberg [1982])。「個人支配」は制度の下で行われる統治のあり方に対置された、制度的な手続きの欠落した支配のあり方を指すものとして基本的にはとらえられている。その中で「個人支配」は、ジャクソンらの「個人支配」研究の副題にも記されているように以下の四つのあり方に分類されている。「君主」(Prince)、「専制君主」(Autocrat)、「預言者」(Prophet)、「暴君」(Tyrant)がそれである。以下、ごく簡単にその特徴を記しておこう。

まず、「君主」とは、アフリカの事例ではサンゴールがその事例として挙げられているが、「抜け目のない観察者であると同時に、補佐や部下の操作に長けている政治指導者」である(Jackson and Rosberg [1982: 77-8])。「君主は昇進をめぐる闘争を統括し、またそれを奨励し、指導者自身と政治体制の正統性を確保するために用いるものの、決してその闘争を野放しにすることも、自らに対する挑戦者が現れることも容認しない」支配のあり方を体現するものと想定されている。そして、次に述べる「専制君主」とは異なり、部下の独立性をある程度容認するという柔軟性を持ち合わせているとしている。これをジャクソンらは「調停の政治」(politics of accommodation)と呼んでいる。

次に「専制君主」は、「君主」に比べると極端に支配における柔軟性を欠いている政治指導者である。ここでは政治は従属と行政に還元され、闘争という要

素は排除されている。「専制君主」にとって国土は自らの資産であり、統治の装置は究極的には本人のみが指揮・展開できる所有物となり、党と政府の役人は自らの僕であり代理人と考えられるものと化し、その意味において絶対主義王制の君主に類似する存在である (Jackson and Rosberg [1982: 78])。ただし、「専制君主」は「人民」(“people”) との間に緊密な関係を保つことを重視する。それは、「専制君主」に対抗し登場する可能性を持つ挑戦者が、決して「人民」の支持を得ているとはいえない状況を常に作り出すことを狙いとしていることにもよっている。具体的な事例としては、マラウィのバンダやガボンのボンゴが挙げられている。

「預言者」と分類される指導者は基本的に構想力を有し、その構想力 (イデオロギー) に合わせて社会の再構成を図ろうとすると想定されている。そして、ここでのイデオロギーは基本的にマルクス主義と考えられている。その際の特徴として、十分な資源を有していないにもかかわらず、政策遂行上の社会、経済、政治条件を障害ととらえ、その除去を試みる結果、成果を挙げるに至らず不満を蓄積していくことにつながる場合があるとみている (Jackson and Rosberg [1982: 79])。

「暴君」は上記の三類型の「個人支配」がさらに悪化 (劣化) し、その権力行使に制度的、道徳的制約が全く欠落し、支配者とその代理人の衝動に任せる形で完全に恣意的な権力行使が行われる場合が想定されている。上記の三類型にはその権力行使に対し、「君主」の場合には「調停の政治」、「預言者」の場合にはその構想力 (イデオロギー)、「専制君主」の場合にはわずかながらも「人民」の支持といった、権力行使上の制約条件を有しているが、「暴君」に至ってはすべての制約を自ら剥ぎ取る形態の権力行使を行うというわけである (Jackson and Rosberg [1982: 80])。

2 「崩壊国家」の生成とその評価をめぐって

国家がその体をなしていないとみられる現象について、早い段階で「崩壊国

家」という概念を用いて議論したザートマンは、国家の基本的な機能である次の三点が喪失していることをその特徴として挙げている (Zartman [1995])。第1に主権に基づく権威 (正統性) (sovereign authority)、第2に意思決定を行うための目にみえる組織 (tangible organization of decision-making)、第3に統合の象徴となるべきもの (intangible symbol of identity)。こうして「崩壊国家」は国家の機能が停止し、国家性 (statehood) が喪失した状況にとらえられた。

ザートマンが提起した問題と関連する研究として、ハーバード大学の「失敗国家プロジェクト」の成果として公刊された二つの論文集がある (Rotberg ed. [2003; 2004])。編者のロトバークは、あいまいな概念装置のもとで議論されてきた複数の概念を改めて整理し、「弱い国家」 (weak state)、「失敗しつつある国家」 (failing state)、「失敗国家」と峻別した上で、「崩壊国家」を「失敗国家」の極限的な現象として位置づける形で類型化を行い、その基準と事例を提示する作業を行っている。ロトバークは政治財 (political goods) の提供能力を重要な基準としてとらえている (Rotberg ed. [2004: 2-4])。この政治財は「眼に見えなかったり、また数量化することが困難であったりする財であり、「市民」(「領民」)の要求によってなされるもの」であり、(物理的な)安全を頂点とし、政治に参加する自由や権利、さらには医療・教育といった行政サービスに至るようなヒエラルキーの形で構成される。

「弱い国家」は、さまざまな理由によりこうした政治財の提供が十分に行えなくなっているほか、国内対立を抱えたり、都市部の犯罪発生率が高くなっていたり、教育・医療面での十分なサービス提供ができない状況に至っている国家を指す (Rotberg ed. [2004: 4])。

また「失敗国家」を特徴付けるものとして、暴力 (あるいは武力紛争) の程度が激しいということ以上に、①その暴力が持続的であること、②その暴力が経済活動と連動していること、③その暴力が既存の政府に対して行われていること、④その結果として、暴力の行使が更なる権力獲得の手段として暴力主体の間で正当化されていること、などが挙げられる。その際に注視しているのは、国家が住民を抑圧し、国内の安全を剥奪する行為を行う点である。それによっ

て、現政権に対する国内の反発を招き、武力紛争に発展する状況が生まれるととらえている。「失敗国家」のその他の特徴としては、国内の周辺地域に対する支配が全く及ばないこと、犯罪につながる暴力が多発すること、政治財をほとんど提供できないこと、国家の諸制度の中でも国家元首を中心とした執行部がかろうじて機能している以外ほとんどは機能停止に陥っていること。また、軍隊のみが規律ある制度として存続しているものの、多くの場合、軍隊自体が政治化され、紛争主体化していることなどがある¹。

そして、「崩壊国家」は「失敗国家」の極限的な姿としてとらえられている。従来の国家が完全な機能不全に陥り、政治財は私的にあるいはアドホックにししか提供されないほか、権威の空白が生じている状態を指している。「崩壊国家」の場合、最も重要な「政治財」である安全は、特定の領域を実質的に支配する、「軍閥」(warlord)などの強者によって提供されるという指摘がなされている²。国家がさまざまなサービスの提供ができない状況に追い込まれることになる結果、人々は「軍閥」となる特定のグループの指導者に依存せざるをえなくなるということにつながる論点でもある。

しかし、「失敗国家」「崩壊国家」といった認識枠組みに対しては、こうした状況に関して外生的な関与を含めて、「平和構築」といった形で、基本的には従来の国家枠組みを維持する形での回復することの必要性を主張する一般的な見方以外にも、そうしたまなざしそのものに対する批判 (Hill [2005]) や、むしろ「崩壊国家」をアフリカにおける新たな秩序形成への起点としてとらえるべきとする積極的な視座も存在する (Doornbos [2002a; 2002b])。これは、「崩壊国家」という状況が、単なる無政府状態ではなく、何らかの秩序を生成する側面に注目する議論にもつながっており、一定の留意が必要な問題である。したがって、はじめにも述べたように、ソマリアの現状が提起しているのは「崩壊国家」をアフリカにおける歴史的課題との連関においてどのように意味づけるべきかという課題にもかかわっているのである³。

3 ソマリア研究の概要と「崩壊国家」としてのソマリア

20 世紀後半におけるソマリア研究はイギリスの碩学ルイスが中心となって研究が展開してきたことは広く知られるところであり、ルイスの一連の研究はソマリア研究の基礎文献として位置づけられる (Lewis [1961; 2002])⁴。そこでは、基本的に氏族社会⁵としてのソマリ民族が描かれるように、近年の多くの著作においても、その政治力学を読み解く際に氏族間関係を軸に組み立てている場合が多く、それ自体説得力を有するものになっているという印象を受ける。しかし、こうした従来の「伝統主義」的な解釈に対して、1990 年代以降氏族関係に加え、経済関係を基にした都市部の「社会階層」をソマリア社会・政治分析に取り入れる試みもなされ始めており、「氏族」というソマリア社会の根幹を規定してきた社会関係に「新風を吹き込む」試みが始められている段階にあると見てよい (Ahmed ed. [1995], Besteman [1999], Besteman and Cassanelli [2000])。ソマリアの社会経済に関しても、その遊牧民の生活や氏族形成に関してはルイスの著作をはじめとしてさまざまな研究があるが、ミクロなレベルでの社会関係の変容等についての著作はそれほど多く著わされていない。ベストマンらの研究はそうした意味で貴重なものといえるし、アブディ・イスマル・サマター (Samatar [1989])、アーメド・ユスフ・ファラー (Farah [1994])、さらに近年のリトル (Little [2003]) による著作がそれぞれソマリアにおける社会変容と政治の関係を読み直す上では重要な研究と考えられる。

また、ソマリアの主に南部を植民地としていたイタリアでは 1961 年の文部省の決定により植民地研究は大学のシラバスから除外されたため、イタリアでの植民地研究はごく限られた研究者によってしかなされてこなかった (Tripodi [1999])。これはソマリアに関しても妥当する。しかし、1989 年にシチリアで開催されたイタリアの植民地政策に関する学会を期にイタリアの植民地政策研究の必要性が認識されたことから、この分野での研究もその後始まっている⁶。また、アーメド・カシム・アリが指摘するように、以下に述べるような 1969 年以降の政治体制のもとで多くのソマリア人知識人は国外に脱出することが多く、

ソマリア人の手によるソマリア国内での研究が困難に直面し、北米へのディアスポラによる研究が中心とならざるを得ない状況が生まれた (Ali [1995])。

しかし、先に問題にしたように 1990 年代のソマリアは「崩壊国家」と認識される状況に至り、その状況とそれに対する対応についての研究が中心に行われるようになっていく。特にアメリカを中心とした国連の多国籍軍による平和執行の失敗以降、「介入」「干渉」をめぐる多くの論考・研究が著わされた (例えば、Drysdale [1994]、Zartman [1995]、Brons [2001])。そこには、近年のテロリズムとの連関の中で「崩壊国家」を検討するものも含まれている (Menkhaus [2004])。

ここでの関心はこうした対応の問題というよりも、なぜ「崩壊国家」と認識される状況にソマリアが陥ることになったのかという問題である。例えば、邦文では、ソマリアでの長い活動経験を持つ柴田が、ソマリアが「崩壊国家」に至った原因として以下の 5 点を挙げている。第一に激変する国際社会への対応能力の欠如 (ここには、政治、経済、社会という広い側面が含まれる)、第二にシアド・バーレ政権への不満、特に北部でソマリア国民運動 (Somali National Movement: SNM) との戦闘とそれに伴う家畜輸出を通じた収入減、第三に生活必需品の高騰と不足、中央銀行の支払い停止 (1989 年段階)、第四に近代国家建設のもとでの農村の権力構造の変化 (軍人と商人の台頭と「伝統的」指導者の相対的な没落) と中央での特定氏族登用、第五に崩壊国家をもたらした「内戦」の構図が単なる氏族対立ではなく、政治権力をめぐる対立であったこと、である (柴田 [2000: 18-19])。上記の整理はやや冗長なので、読み替えると論点は以下のようなだろう。第一に国際的な要因である。冷戦構造のもとでのクライアント国家という特性による不安定性と、「アフリカの角」地域における領土問題とも連動する「難民」発生による伴う国内の不安定化である。第二に国内の政治状況である。オガデン戦争後のシアド・バーレ体制の正統性への疑問と連動する国内外の反政府勢力の台頭と、1980 年代末の内戦状況である。第三に経済状況である。1980 年代末の内戦の結果、北部の家畜輸出の停止により外貨収入が得られなくなったほか、金融機関も機能不全に陥り、経済が深刻な危

機に瀕したのである。第四にシアド・バーレ体制下での社会変容である。地方における権力構造の変質（伝統的指導者の没落と商人、軍人を中心とした新興勢力の台頭）と、対立の性格変化（紛争の政治化といってもよいかもしれない）である。基本的には、シアド・バーレ体制の内外政策の帰結として「崩壊国家」がもたらされたという見方である。

以下で検討する点も、「出来事」としての「崩壊国家」を検討するうえで、基本的にはこうした要因を確認するものとなる。

第2節 シアド・バーレ体制の変容

1 体制確立以前のモハメド・シアド・バーレ

シアド・バーレの生年、生誕地ともに不明確である。生年については 1912 年から 1921 年の間に諸説が混在しているほか、生誕地に関してもゲド・リージョン (Gedo Region) にあるガーバハレ (Garbaharey) という町だとする説のほか、エチオピアのオガデン地方の町シーラーボ (Shiilaabo) とする説があり合意をみていない。シアド・バーレはダロッド (Darod) の支族であるマレハン (Marehan) に属している。6 人兄弟の末っ子で他はすべて女兄弟であったとされるほか、父は 6 歳のときに他界したが 100 頭以上の駱駝を保有する比較的裕福な一家であったともいわれる (Dualeh [1994: 30-32])。

16 歳で当時のソマリアを統治していたイタリアのファシスト軍に入隊する。その際に「敵に同情はいらない。ただ破壊するのみ」(“No compassion to the enemy. Destroy!”) というエートスの影響を強く受けたともいわれる (Dualeh [1994: 27])。こうした中、軍人としては優秀な人材としての評価を受け、イタリアの植民地軍組織の中で、現地出身者が昇りうる最高位 (inspector) にまで上り詰めることになった。こうした能力を買われ、1953 年にはイタリアでの士官の訓練コースに選抜されている。コースの最終試験は主席で終え、その時点

で中尉 (lieutenant) の地位に任ぜられ、独立後のソマリアの司令官を囑望していたとされる。ただし、独立を目の前にして氏族間の主導権争いが激しくなる中、ハウィエ (Hawiye) が優位に立ったことで、その当初の野望は絶たれることになった。こうした中で、シアド・バーレは政治的任命に対する氏族間での不公平感を募らせたという指摘もある⁷。

しかし、こうした経緯を経ながらも、1965年に当時准将のシアド・バーレはソマリア陸軍司令官に就任している。

2 シアド・バーレ体制の時期区分

シアド・バーレの支配体制は、基本的には以下の三期に分類される場合が多い。第一期が「革命期」で1969年～1976年頃。第二期がオガデン戦争を契機とし、その後一党体制から「個人支配」(one-man state) へ向かい、国内的な地盤再形成と集権体制の強化を狙った時期で、1977年～1980年代初頭。第三期がシアド・バーレ体制の末期に当たる時期で、これは家族・氏族王朝的支配の色彩を強めた時期でもある。ハシム (Alice Bettis Hashim) の研究では、以上の時期が二つの移行期として読み替えてとらえられる。1969年からオガデン戦争が開始される1977年をシアド・バーレの支配のあり方として、「個人支配」研究における類型化での「預言者」から「専制君主」に変質する時期、1978年から1990年が「専制君主」から「暴君」への移行期である (Hashim [1997])。ハシムはオガデン戦争後の1978年段階でシアド・バーレは「暴君」となったこととらえているので、オガデン戦争をはさんで、シアド・バーレ体制の変質は急速に進んだとみていると考えられる。これらの時期区分は、完全に一致しているわけではないが、上の三つの時期を「預言者」「専制君主」「暴君」としての支配時期と読み替えたとらえ方とみることができる。いずれにしても、シアド・バーレ体制はその20年以上に及ぶ時間の中で大きく変質していくという点にひとつの特徴を有しているともみることができる。

以下では、オガデン戦争を分水嶺とする二つの時期を検討しておきたい。た

だし、その前に独立後、シアド・バーレ体制ができる背景としての文民政権期をまずは簡単にみておこう。

(1) 独立後の「議会制期」(文民政権期)：1960～1969年

はじめに1960年の独立後のソマリア共和国における内政を概観し、なぜ1969年のクーデタに至ったかについて考えておきたい。この時期のソマリアは、これまでの歴史の中で唯一民主主義的な政治体制をとっていた。しかし、他のアフリカの独立諸国では政党がエスニック集団を基盤としていくのと同様、政党政治の中に氏族関係が色濃く反映されるばかりでなく、支族や血族集団にまで細分化された60を超える政党が乱立する状況が生まれることになった。

しかも、政府の中では氏族関係を色濃く反映した人事登用や汚職がはびこり、こうした「パトロン・クライアント関係」からはずれた支族の間には、政権への不満が渦巻く状況にあった。1969年10月15日に発生したアブディラシード・アリ・シェルマルケ (Abdirashid Ali Shermarke) 大統領の暗殺にかかわった側近の警備員もこの時期冷遇されていた氏族の出身者であった (Lewis [1972: 400])。

こうしたことから、1970年代初頭の研究の中では、当時のハンチントンらの近代化推進者としての軍の役割を強調する学説にも影響される形で、これに続くシアド・バーレのクーデタを評価するとともに、就任後の演説での「議会制期」に対してシアド・バーレが行っていた、例えば以下のような評価を額面通り受け取る雰囲気が存在していた (Laitin [1976: 452])。

「軍による介入は止むを得なかった。汚職、賄賂、縁故主義、公金横領、不正義、宗教や法律を遵守しない姿勢などの悪をもはや見逃しておくことはできなかった。法律は押しのけられ、人々は欲するものを手に入っていた」

(2) 1969年クーデタからオガデン戦争へ

1969年10月21日には軍がモガディシュを制圧し、11月1日にシアド・バーレ少将が最高革命評議会（Supreme Revolutionary Council: SRC）議長への就任宣言を行い、ここにその後20年を越えて続くシアド・バーレ体制が樹立されることになる。シアド・バーレは国名をソマリア民主共和国（Somalia Democratic Republic）と変更したほか、1970年10月21日には「科学的社会主義」（scientific socialism）路線への転換を表明する。ここには、文民政権期における混乱を招くことになった氏族主義、汚職、縁故主義等に抗する政策を打ち出す必要性が認識されていたことが示されているとあってよい。こうした初期の政策について検討しておきたい。

①行政機構

まず、SRCである。これは24名の将校から構成される、唯一最高の法・政策決定機関であった。SRCはSRCのメンバーによって任命された（文民閣僚からなる）閣僚評議会（Council of Secretaries）による支援を受けており、閣僚評議会が日常的な行政手続きを遂行する組織として位置づけられていた（Samatar [1989: 118]）。クーデタの後、地方行政においてはそれまでの文民の知事（governors）や行政官（commissioners）のポストを軍人が占めることになった。初めの1年半ほどの期間は、現地からの人事採用を全く行わない形での行政が施行されたが、1971年地方レベルにも革命評議会（Regional and District Revolutionary Councils）が設立され、地方行政の下支えを行う体制がとられることになった。中央から任命された知事や行政官は、それぞれの革命評議会の構成員を選抜し、自動的にその議長を兼ねる形になった。こうした経緯から類推されるように、地方の知事や行政官はSRCにのみ責任を負うのであり、末端の人々はこうした行政による権力の横暴があったとしてもそこでの保護の手段を持たない統治形態でもあった（Samatar [1989: 118]）。

1976年にソマリア革命社会主義党（Somalia Revolutionary Socialist Party: SRSP）が設立されたが、上記の構造は地方の評議会が政党に姿を変えただけで

ほぼ温存された (Samatar [1989: 119])。地方における党執行部の任命も中央からなされる形が継続していた。サマターの調査では、ダガーン (*Dagaan*) と呼ばれる地方の人民会議も「選挙」を通じて選出された人々によって構成されるという建前はとっていたものの、実体は茶番に過ぎず、実質的な選挙の実施は行われなかったとしている (Samatar [1989: 119])。その結果、「分権化」されたとはいえ、実質的には中央集権的な体制が色濃く残存しており、末端の組織であった村落評議会 (Village Council) も実質的な機能としては、徴税と政府の命令の伝達に限定されていた (Samatar [1989: 120])。

②科学的社会主義／新しいソマリ・ナショナリズム？

すでに述べたように、シアド・バーレは 1969 年のクーデタから 1 年後の「革命記念日」にソマリアを構想するイデオロギーとして科学的社会主義を打ち出す。ソマリ語で社会主義を特徴付けるハンティワダグ (*hantiwadaag*) という言葉があるが、この文字通りの意味は「家畜を共有する」(あるいは「富を分かち合う」という意味である。そのため、科学的社会主義は当初「知識 (知恵) に則って家畜 (富) を共有すること」(livestock sharing which sits on knowledge) であるという形に「翻訳」されていた。しかし、この意味があまりに消極的であるという理由で「知識 (知恵) に基づいて作られる家畜 (富) の共有」(livestock sharing which is built on knowledge) という形に改めて「翻訳」された (Laitin [1976: 463])⁸。このもとで銀行との国有化政策や農業 (牧畜) 重視の資源配分を実施する政策を展開していくことになる (Samatar [1988: Chapter5], Samatar [1989: 120-151])。

また、この時期の特徴として、「議会制期」の多くの問題に対応するため、「新しいナショナリズム」を指向するとともにとらえられた政策が実施された。具体的には、公式文書で氏族に言及することを禁止するなど「ソマリ人の団結」を指向し、氏族主義を解消する政策、言説変化を促進する政策が採られたのである (Laitin [1976: 455-462])⁹。またソマリアにおける「文化大革命」¹⁰との称されるソマリ語のラテン表記の導入を 1972 年の「革命記念日」に発表する¹¹。

また、男女平等と女性の組織化という点でも新たな政策を施行している。1975年1月に男性と同等の財産権の規定を有する新たな民法を導入したほか、ソマリア女性民主機構 (Somali Women's Democratic Organization: SWDO) を設立し、女性の政治意識と政治参加を向上させる試みを行っている (Hashim [1997: 89])。

こうした比較的初期のシアド・バーレ体制が一定の指向性のもとで機能していた点が、ジャクソンとロスバークやハシムによる「預言者」として類型化される材料となっていたのである。さらに、ライティンは「議会制期」との比較の上で、制度の細部における「民主主義」の要素は減じられ、権威主義的な体制への転換が行われながらも、ソマリアにおける民主政の社会的基盤の回復が始まったとする評価を行ったことも、こうした「表」の側面に注目するとともに、「近代化」を肯定的に見ようとする学術的評価の時代性が見え隠れしており興味深い (Laitin [1976: 468])¹²。

③「恐怖政治」と氏族優遇：「科学的シアディズム」へ

しかし、「預言者」としてのシアド・バーレは次第に「専制君主」としての特徴を強めていくことになる。治安局 (NSS: National Security Service) による取締りが厳しく行われたほか、法律の訓練を受けていない軍人による裁判機関であった治安裁判所 (National Security Court) における裁判も頻繁に行われた (Lewis [2002: 211-214])。また、上述の新民法の導入に反対する抗議行動を起こしたイスラム教の指導的立場にあるシェーク¹³10名を処刑するなど強権的な姿勢をみせてきた。

さらに、クーデタ、ならび科学的社会主義導入の際の最大の課題として提起されていた「氏族主義」の基づく政治のあり方を打破することと相矛盾する政治実践が行われていた。これも広く知られていたことであるが、アングラのコードネームM.O.Dと呼ばれていた次のダロッドに属する三支族への優遇政策が行われていたのである¹⁴。Mはマレハン (Marehan)、Oはオガデン (Ogaden)、Dはダルバハンテ (Dulbahante) である (Lewis [2002: 219-223])。こうしたことから、1970年代半ばまでに時期にかけてのシアド・バーレ体制におけるレト

リックと現実の乖離が明らかになってくる (Samatar [1988] , Lewis [2002])。また、軍や官僚機構においてはイサックの追放、北部の統治においてはダロッドの将校を配置するなど「ダロッド化」ともいえる氏族偏重主義に傾斜していく (Dualehl [1994: 106-107])。

こうした政策に加え、サマターは SRSP が成立した 1976 年以降、ソマリアの最も重要な 5 つのポストである、国家元首、軍司令官、高等司法評議会、閣僚評議会議長、SRSP 書記局長をシアド・バーレが独占していることに対し、その権力への制度的な制約が欠如していることを問題視した (Samatar [1988: 149])。

こうした政策レトリックと現実の乖離が明確になってきた状況に対し、ルイスはこの時期におけるシアド・バーレ体制の評価として「科学的シアディズム」という表現を用いている (Lewis [2002: 223-225])。これは「預言者」から「専制君主」への変質と軌を一にするものと考えられる。

④オガデン戦争

そして、シアド・バーレ体制の分水嶺と考えられるのが、エチオピアとの間で戦われ、最終的にソマリアが敗北することになったオガデン戦争である。オガデン地方をめぐる歴史的経緯についての詳述は他に譲るが、独立後の「議会制期」以降、ソマリアはオガデン地方の分離独立を基本的に支持する外交姿勢をとってきた。1977 年に、オガデン地方における分離独立を目指して戦っていた西ソマリ解放戦線 (Western Somali Liberation Front: WSLF) を支援する形でソマリア軍が侵攻し、当初オガデン地方への有効支配を確立した。しかし、10 月にはエチオピア側からキューバ・ソ連との共同戦線の下で反撃が開始される。これを受け、ソマリアは 1974 年にソ連との間で締結していた友好・協力条約を破棄するという事態が生じる。これに伴い、ソ連からの軍事顧問の国外退去を命令する一方、600 名のソマリア人士官訓練生がソ連から強制送還された。この事態を受けシアド・バーレは 1978 年には、ソマリアが期待していたアメリカからの軍事支援を停止されて孤立状態に陥る。最終的に同年 3 月にはオガデンからの撤退を余儀なくされるとともに、オガデン地方からの大量の難民がソマ

リアの北部に流入する事態を招く結果となった。

このオガデン戦争の敗北の短期的な結果として、ライティンは以下の三点を挙げている。第一にソ連、アメリカ、アラブ諸国が支援を行わなかったことにより、ソマリアとシアド・バーレは屈辱的な対応をうけたこと、第二に第一の点の裏返しでもあるが、シアド・バーレ体制の外交上の能力への懐疑が増長されたこと、そして第三にシアド・バーレ自身の指導力そのものへの疑念が浮上してきたこと、である (Laitin [1979])。こうした影響は具体的な形を取って表面化することになった。オガデンからの撤退の直後にハルゲイサで行われたオガデン戦争に関する軍部との事後分析会合では、一部将校からシアド・バーレの指導力そのものを厳しく問う発言が相次ぎ、シアド・バーレはこうした将校 17 名を処刑している (Samatar [1988:137-138])。さらに 1978 年 4 月には「マジヤーティーン氏族 (Mijerteen) の将校を中心とした」とされるクーデタ未遂が発生する¹⁵。オガデン戦争の敗北を受けて発生したこうした一連の事件は、シアド・バーレ体制の更なる変質を誘発する。

(3) オガデン戦争の余波から家族・氏族王朝的支配¹⁶へ

この時期は、「個人支配」の類型で言えばシアド・バーレが「暴君」としてのあり方を「完成」させる時期であると同時に、国家としてのソマリアは「失敗国家」に向かう時期でもある。以下ではその過程を記述していくことにしたい。

①シアド・バーレ体制の再構築

オガデン戦争の敗北を受けて、その体制の正統性の確保のために、1979 年 1 月に新憲法を発表する。ここには「国家安全保障」が個人の権利に優先するといった内容が含まれていたほか、司法の独立の保障十分に担保されないなど、大きな問題を抱える内容であった (Samatar [1988: 10-141])。しかし、同年 8 月の国民投票では 99%の支持を持って憲法案は信任され、見かけ上は正統な手続きを経た新憲法が制定される形になった¹⁷。こうして一党体制が制度的に成立することになる。また、同年 12 月には「人民議会」選挙が実施された。

こうした国内的な政権の「正統化」の試みと並行して、新たなパトロンとしてのアメリカとの関係構築の動きが活発に進められたのもこの時期である。1980年8月にはソマリアとアメリカの間で、アメリカのベルベラ港とベルベラ空軍基地の軍事使用とアメリカからソマリアへの5300万ドルの経済援助と4000万ドルの軍事援助の供与が合意されている。

しかし1980年10月には、上述したオガデン戦争に伴って発生した北部への難民問題¹⁸に対応するため、国家非常事態が宣言され、一時的に軍事政権化してSRCが復活するという事態になった¹⁹。

②反政府勢力の結成と内戦：「失敗国家」化

オガデン戦争の余波は、国内外における反シアド・バーレ体制を掲げる反政府勢力の成立に拍車をかけることになった。1981年には1978年のクーデタを企てたとされたマジャーティーンが中心となって、エチオピア領内でソマリ救世民主戦線（Somali Salvation Defense Force: SSDF）がゲリラ組織として活動展開を開始する。また、同年シアド・バーレ体制下で冷遇され続け、またオガデン戦争後に多くの難民が流入したことによってシアド・バーレ体制に対する最も強い批判勢力であったイサックがロンドンでソマリ国民運動（Somali National Movement: SNM）を結成すると同時に、エチオピアにも拠点を形成した。こうした状況への対応として、海外での反シアド・バーレ体制を監視するために大使館はディアスポラの監視機能をその重要な任務とすることになるほか、国内での厳しい情報統制が続けられていく（Lewis [2002: 250-251]）。

こうした反シアド・バーレの姿勢を明確にとる組織の形成を受け、特に氏族帰属を利用する形で、その時点での「味方」にその時点での「敵」と対峙するための武器供与を行うという形の「分離支配」が貫徹されていく（Lewis [2002: 252-254]）²⁰。しかし、こうした対応はオガデン戦争後国境を越えて数多く流入し始めていた武器の流通をさらに加速し、ソマリア国内における武器の闇市場に流通することを助長した。この結果、反政府勢力はそれぞれ武装組織としての形態を整えていくことにもつながった。SNMなどの勢力が結成されたことに

より北部に対しては厳しい軍事・経済的報復措置がとられた。1987年には、SNMが北部を占領するまでに勢力を拡張した。これに対し、シアド・バーレは1988年にエチオピアとの間で平和協定を締結し、相互に国内に拠点を持つ相手国側の反政府勢力への支援を中止することを合意したため、SNMはエチオピアにおける拠点を失ったため、ソマリア国内に流入し、政府軍との間で激しい戦闘が行われる事態に至った。この結果、北部の州都ハルゲイサは廃墟と化すなど、1980年代末には北部を中心に「内戦」状況に向かう（この他の主要な反政府勢力については表4を参照）。こうした事態は、ソマリアがこの時点で先に挙げた「失敗国家」の類型に相当する状況を呈していた解釈できる。

③縮み行くシアド・バーレ体制

こうした国内状況の中、シアド・バーレは1986年5月には交通事故で瀕死の重症を負い、サウジアラビアにて治療を受けている。6月には職務に復帰しているものの、体力的な衰えは隠すことができないものであった（Lewis [2002: 254]）。この間、上級副大統領ムハマド・アリ・サマター（Muhammad Ali Samatar）が憲法規定の下で大統領代行を務め、シアド・バーレの不在中の政権転覆などの策謀を未然に防ぐために非常事態を宣言した。この対応は、政権内部のオガデンとダルバハンテを構成する「憲法派」（constitutional faction）と呼ばれるグループと親族系列に当たるマレハンの「5人のギャング」（‘Gang of Five’）双方の支持を得るものであった。しかし、復帰後のシアド・バーレはこうした対応へのなんらの評価も行わなかったことを受け、1969年の政権奪取後初めて広く「シアド・バーレ後」が議論されるようになった（Lewis [2002: 255]）。

同年9月には党中央委員会がシアド・バーレの大統領任期の7年延長を提案し、11月にこの件がSRSP総会で承認された。そして12月に行われた選挙では99.9%という異常な「高支持」で大統領に再選される。

こうした国内状況の背後で、シアド・バーレの登用体制も1970年代半ばまでとの間で大きな変化を呈するようになっていた。言い換えるとM.O.D.からの登用体制が崩れ、特に1986年の事故以降の時期には、より「狭い」範囲からの登

用が図られるようになる。より具体的にはマレハンの政府部内における突出傾向が顕著にみられるようになったのである。これは、シアド・バーレ体制が内に籠もる (inversion)、あるいは縮み行く (shrink) 状況と表現できるかもしれない。そしてそのネポティズムのあり方は、「憲法派」からの離脱と「5人のギャング」派の偏重という形に傾斜を強め、最終的には「チャウシェスク・スタイル」とも称される家族偏重の人事登用の色彩を濃くしていくまでに至る (Hashim [1997:104])。

④経済危機の進行

1980年代以降のソマリアにおける経済環境は、国際機関と西側諸国からの莫大な援助の流入に支えられていた。特に1980年代前半の5年間のアメリカからの援助は1億4000万ドルに上ったほか、1980年の国連と開発援助委員会(DAC)諸国からの援助も4億5000万ドルに上り、これは同年のソマリア中央政府歳出の9割を占める額であった。しかし、こうした援助のほとんどは首都モガディシュに集中し、軍事目的か都市住民向けのインフラストラクチャの建設・整備に用いられることになった。また、国家予算の8割以上が軍事費や官僚の人事費に回される形で都市に支出され、地方と農村の発展のための資源投下はほとんどなされなかった(柴田 [1993: 39])。

特に北部の家畜輸出が外貨収入の8割を占める形で外貨獲得の中心産業として機能する一方、都市住民の食糧や石油などを輸入するソマリアの経済構造が作られていった。これは他のアフリカにおける経済政策と類似するものでもあった。農民・遊牧民は収奪される対象となったため、都市と地方の経済格差がもたらされ、都市は困窮化し都市への人口移動が生じた。このもとで、都市では官僚と軍人、商人などの新興勢力が台頭するとともに、地方では氏族の有力者の弱体化が進んだと考えられている(柴田 [1993: 42-43])。

マクロ経済に関しても1980年以降構造調整が導入され、通貨切り下げなどの管理政策が行われたこともあり、1981年から1983年までは安定した。しかし、1984年に更なる通貨切り下げに反対して一時的にIMFとの関係を絶ったこと、

外貨獲得の稼ぎ頭である家畜の輸出が疫病発生のため最大に輸出国であったサウジアラビアが輸入禁止措置をとったために大きな痛手をこうむったことなどのため、100%に迫る激しいインフレが発生した。このあと構造調整は再び導入されるものの、経済危機は続き、累積債務が増大したほか、1980年代末には北部での戦闘の拡大により家畜の輸出が不可能になったことから外貨獲得が困難に直面し、生活必需品の不足に伴いインフレがさらに進行した。1989年までには国営銀行は機能停止に陥り、商業貯蓄銀行も支払い停止に追い込まれるなど、経済危機はさらに深刻の度を増す状況になった（柴田 [1993: 41-42]）。

⑤ シアド・バーレ体制の崩壊と「崩壊国家」への道程

ソマリアでは各地で反シアド・バーレ体制の動きが加速していく。シアド・バーレは反体制派の民主化要求にこたえる用意を再三口にするものの実行を伴わず、反シアド・バーレの姿勢はさらに強まることになった。1989年7月には2000人の反政府活動家を逮捕したほか、9月には政府軍による激しい弾圧が行われる。そのため、1990年には人権侵害を理由として海外からの援助が停止され、シアド・バーレ体制が首都モガディシュの外には支配が及ばない状況を招き、シアド・バーレは「モガディシュの市長」(‘Mayor of Mogadishu’) と考えられるほどにその支配力を喪失する状況に至る（Lewis [2002: 262]）。

1990年5月にはモガディシュで戒厳令が布かれ、また6月にはソマリアの知識人や有力者114名から構成された非武装のグループであった「マニフェスト・グループ」が「モガディシュ声明」を発表する。ここには、シアド・バーレ大統領の辞任のほか、選挙による暫定政府の樹立等が要求されていた²¹。

SNMは1990年12月から1991年1月にモハメド・ファラー・アイディード（Mohamed Farah Aideed）率いる統一ソマリア会議（United Somali Congress: USC）の民兵がいっせいに放棄し、首都モガディシュで激しい戦闘を行い、軍・警察の本部を占拠したほか、大統領府にも進攻し、シアド・バーレを追放した。USCは1月27日に勝利を宣言したほか、「マニフェスト・グループ」との協力のもと暫定大統領としてUSCの創始者の一人であり、また「マニフェスト・グ

グループ」の主要メンバーでもあったアリ・マフディ・モハメド (Ali Mahdi Mohamed) が提案された。しかし、民主的な政権樹立のための国民議会開催を要求していた他の勢力に加え、アイディードもそれに反対し、USC の分裂と他の武装勢力との糾合が繰り返される形で戦闘が激化していくことになった。こうした中 1991 年 4 月には、シアド・バーレが勢力を盛り返しモガディシュ西部に迫ってきたため、アイディードが中心となって新たに結成されたソマリア解放軍 (Somali Liberation Army: SLA) が最終的にシアド・バーレを打倒した。シアド・バーレはその後ケニアに逃亡し、そこからナイジェリアに亡命した。

アイディードとアリ・マフディ間の対立は、同じ氏族ハウィヤの支族であるハブルゲディルとアブガル間の「はじめての」対立という側面を持った。それは、支族間の対立の帰結ではなく、アフリカにおける 1990 年代以降の紛争でもしばしば指摘されてきたように有力者により動員の道具として用いられるという政治化された氏族 (支族) という問題でもあった (柴田 [1993: 53-56]) ことは、ソマリアにおける「内戦」と「崩壊国家」を考える上で重要な論点となる。

この後にアメリカを中心とする多国籍軍による「平和執行活動」が失敗に終わったこと、そしてさまざまな和平協定締結の試みがなされ、暫定政府が設立されているが、その実効性が確保されず、「崩壊国家」という状況が今日に至るまで継続していることはよく知られている。しかし、その詳細を改めて検討することは、本章でひとまず設定した時間枠組みを超えるものであり、また最後に述べるような観点にたち 1990 年代以降の状況からシアド・バーレ体制を逆照射する作業として、あえて今後に積み残すことにしたい。

暫定的なまとめと今後の課題

本章では、ソマリアにおけるシアド・バーレ体制の変遷と終焉を「個人支配」と「崩壊国家」の生成という視角の中で考察してきた。クーデタで政権を奪取した直後の「預言者」から「専制君主」そして「暴君」への変容とそのもとで

の「分離支配」という形の政策の中で、ソマリアの文脈における氏族間の政治対立が誘発され、しかもその政治対立が容易に武装勢力間の対立に転化しやすい状況が準備されてきたことは確かである。それゆえに、シアド・バーレ体制の崩壊自体が軍事的敗北によってもたらされ、アイディードによって最も明確に示されたように、その後の暫定政府の樹立への拒否権が軍事的な手法で提起される状況が、シアド・バーレ体制下で醸成されたことは否定しがたい。その意味において、ソマリアにおける「出来事」としての「崩壊国家」の生成を説明する上で、シアド・バーレ体制という「個人支配」の様式が持つ意味は大きいと考えられる。これは、柴田が提起したような要因による説明が可能な部分である。

シアド・バーレ体制を考える上で、1990年代半ばに北米のソマリ研究学会（Somali Studies Association of North America）の会長であった比較文学者のアーメドがその論考の中で行った以下の議論は、抽象的であり、「崩壊国家」の問題を氏族対立に還元しすぎている傾向があるものの示唆的ではある。ここで述べられているのはシアド・バーレ体制が政治化した氏族対立というソマリア社会の構造を「最終的に」作り上げ、それが1990年代の「崩壊国家」の状況下で再生産されているという議論として理解できるものである。

「シアド・バーレが権力の座についたことが悲劇であるとするれば、その崩壊後におきてきたことは茶番であった。この点にはしっかりと注目しておく必要があるし、シアド・バーレはこの悲惨な状況の脚注（footnote）にはなっていない。内戦はシアド・バーレの数々の行動の中にすでに予兆を有していた。このことはシアド・バーレをソマリ文化の真正な体現者として読み解く必要性を示している。（中略）シアド・バーレに公平であるとすれば、彼は50年以上にわたってもつれてきた（ソマリアにおける）困難なパズルの最後の一片であった。（改行）そして、その呪い（curse）はいまだにわれわれとともにある。そしてソマリアの知識人が勇気を持って、もはや『部族的な』（“tribal”）政府や政治体制を営む

ことが不可能であることを人々に告げることが必要である。こうした方向性（引用者注：『氏族主義的な』政府の樹立）を指向したすべての試みは無に帰している（中略）その代わりにわれわれは新たな倫理（ethic）²²を構築しなければならない」（Ahmed ed. [1995: 151]）。

こうしたアーメドの議論を加味すれば、「崩壊国家」という一種の内戦状態はシアド・バーレ体制の中にすでに予想されていたということでもあるし、その意味でシアド・バーレが「崩壊国家」の脚注になってはいないとの指摘は、「出来事」としての「崩壊国家」をシアド・バーレ体制との連関で考える必要性を指摘する議論と符合する。

しかし、その後 15 年に及び「崩壊国家」が継続しているという状況を、果たしてシアド・バーレ体制のみによって説明できるだろうか。確かに、シアド・バーレ体制の下で「構築」されてきたソマリアの「近代国家」像が非常に影響力を持つ形で創造されたことが、そうした国家の建設への回帰を望みにくい意識を醸成している可能性は捨てきれない。これは、上でシアド・バーレはソマリ文化の真正な体現者であり、50 年以上にわたってもつれてきた困難なパズルの最後の一片であったという指摘にもかかわる問題である。これは、本来的に氏族間対立がソマリアの政治構造を規定しており、シアド・バーレがその構造を完成させたという認識に立つ議論であり、ソマリ社会が政治的に対立する氏族間関係がシアド・バーレ体制後の「崩壊国家」の下で再生産されている状況を指すものと理解される。無論この指摘の妥当性自体は、改めて検証する必要があるし、アーメドが指摘するようにそれがソマリ社会に深く根ざす「呪い」なのかどうかについても慎重に検討を加える必要がある。この問題は、「崩壊国家」状況下の対立の構図を改めて検討することによってしか解明できない問題である²³。とはいえ、この指摘はシアド・バーレの「個人支配」を 1990 年代以降の状況から再考する必要性を指摘するものとして興味深い。

本章がたどり着いた地点は、おそらく「個人支配」としてのシアド・バーレ体制は「崩壊国家」としてのソマリアという体制崩壊後の状況から改めて読み

直す必要があるという視点の獲得である。この「積み残し」を次なる課題としてひとまず本章はここで閉じることにしたい。

注

¹ これ以外に、極端にインフラ（道路など）が破壊され、補修の対応がなされていないことを、「失敗」を示す特徴的な事例として挙げている。また、教育・医療制度もほとんどの場合、確保されず、粗悪な民間セクターがその代替機能を果たしている。

² ただし、ここでは「軍閥」等の勢力が「崩壊国家」の下でしか生起しないということを限定的に議論しているわけではない。

³ 本章では取り上げていないものの、ソマリアの国境内での「独立」を宣言して政治的安定を維持している「ソマリランド」をどのように考えるかという問題にもかかわっている。

⁴ 一部の研究者の間には、ルイスの研究での植民地統治下における英国の役割の評価等をめぐり、異論が唱えられている (Ali [1995])。

⁵ ソマリアの氏族社会については以下のように説明される。ラハウィン、ディギル、イサック、ダロッド、ディル、ハウィヤが6氏族であり、本章で出てくるオガデン、マレハン、マジャーティーンは支族、さらにその下位集団としてのディヤ集団がある。図1を参照。

⁶ ただし、トリポディによれば、この際の会議のペーパーを編集した論文集がイタリア文化省から出版されたのは1996年であり、イタリアが依然として植民地研究に十分な関心を寄せていないのではないとみられている (Tripodi [1999: 6])。

⁷ 1959年に首相のアブドゥライ・イサ (Abdullahi Issa) によってダロッドの支族マジャーティーンのマホメド・アブシール・ムサ (Mohamed Abshir Musa) が警察庁長官登用されたことに対し、自らも同じくダロッドでありながら登用されなかったこと、あるいは初代の軍司令官としてハウィヤのダウド・アブドゥル・ハーシ (Daud Abdulle Hersi) が任命され田ことなどが指摘されている (Dualeh [1994:29-30])。

⁸ ライティンは家畜、知識に「翻訳」しているが、ハシムは富 (wealth) と知恵 (wisdom) と「翻訳」しているので、ここでは併記しておく (Hashim [1997: 83])。

⁹ 例えば 'cousin' (*ina'adeer*) の代わりに comorade (*jaalle*) を用いるなど、具体的に用語法上の制約が設けられた。

¹⁰ ライティンはこれに関して革命と復興の奇妙な融合という形で表現している。この詳細については Laitin [1976] を参照のこと。

¹¹ ただし、ソマリアの固有名詞等のラテン語 (アルファベット) 表記については統一されていないため、複数の表記が混在している状況にある。この問題は以下でも指摘されている。Ahmed [1995]。

¹² こうした見解に対しては、1980年代における研究においては批判が出ていることは想像に難くない。例えば以下を参照。Samatar [1988: Chapter8]。

- ¹³ シェークは敬虔なイスラム教徒で僧侶の立場に相当する。
- ¹⁴ 例えば表 3 でも支族までは不明であるが、ダロッドを重用される傾向にあることはいくつかある。
- ¹⁵ サマターは、この問題について、果たして一部氏族のみの意向によるクーデターの企てであったか否かを注意深く検討する必要があると指摘している (Samatar [1988: 138])。実際には、この失敗のあとにマジャーティーンが多くが国外に逃亡せざるを得なかったとされる。ここで提起されているのは、ソマリア研究における「氏族」をどのようにとらえる必要があるのかという方法的な問題にもかかわるものである。
- ¹⁶ この表現はルイスによる (Lewis [2002: 254])。
- ¹⁷ 実質的には、国民投票の際の雰囲気や「自由と公正」に関しては多くの疑問が指摘されている (Samatar [1988: 141])。
- ¹⁸ ソマリアへの「難民」の流入の実態に関しては、公式発表されている難民の数と実際の難民の数の間には大きな乖離があるという指摘がなされている (オガデン戦争後 10 年間の「難民」数は 84 万人とされているが、実際にはその半数程度ではないかと推測されている) ほか、「難民」がシアド・バーレの下支えのために「招かれた」という問題が指摘されてきた (柴田 [1993])。
- ¹⁹ SRC は最終的にはシアド・バーレが初めてアメリカを訪問した 1982 年 3 月に廃止された。
- ²⁰ それは例えば以下のような形で現象化した。SNM の成立とイサクの脅威への対抗という動機のもと、シアド・バーレは国外追放されてエチオピアにいるマジャーティーンのリダー (SSDF のメンバー) に恩赦を与えようと試みた。これは、ソマリアに戻りシアド・バーレ体制を支持するという条件の下で、有利なビジネスの機会と国軍におけるポストを提供するというものであった (Hashim [1997: 104])。こうした形の「分離支配」は 1980 年代末により大掛かりな形で行われ、軍の保有する近代兵器が体制を支持する支族に分配された (柴田 [1993: 48])。
- ²¹ これを受けて、シアド・バーレ政権は 1990 年 6 月にメンバー 45 名を逮捕し、裁判で死刑を含む長期刑が課したが、モガディシュでの大衆行動により全員が釈放されている。
- ²² アーメドはこの「倫理」についての詳細を述べているわけではないが、現在の (氏族間対立という) 悪循環を絶ち、氏族関係を経て「公正な社会」(just society) に備え、また想像できる力を付与された「彼岸」(the other side) に抜け出すようなことが可能となる解放の政治 (a politics of emancipation) を希求する必要性を提起している (Ahmed ed. [1995: 151-152])。
- ²³ これは、「崩壊国家」における氏族の意味をどのようにとらえるのかという重要な問題である。柴田の議論にも含まれているほか (柴田 [2000])、本文で述べた 1990 年代後半以降のアーメドやベストマンらの新たなソマリア研究の動向とも連動する課題でもある (Ahmed ed. [1995], Besteman [1999], Besteman and Cassanelli [2000])。

参考文献

〈日本語文献〉

- 柴田久史 [1993] 『ソマリアで何が？』(岩波ブックレット No.302)、岩波書店。
—— [2000] 「なぜ、ソマリアは国家が崩壊したのか」『NIRA 政策研究』13 (6) pp16-19。

〈外国語文献〉

- Ahmed, Ali Jimale. ed. [1995] *The Invention of Somalia*, Lawrenceville: The Red Sea Press.
Ali, Armed Qassim [1995] “The Predicament of the Somali Studies,” in Ahmed. ed. [1995] pp.71-80.
Bahcheli, Tozun Barry Bartmann, and Henry Srebrink. eds. [2004] *De Facto States: The Quest for Sovereignty*. London: Routledge.
Besteman, Catherine [1999] *Unraveling Somalia: Race, Violence, and the Legacy of Slavery*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
Besteman, Catherine, and Lee V. Cassanelli [2000] *The Struggle for Land in Southern Somalia: The War behind the War*. London: Haan Publishing.
Brons, Mari H. [2001] *Society, Security, Sovereignty and the State in Somalia: From Statelessness to Statelessness?*, Utrecht: International Book.
Clarke, Walter S. and Robert Gosende [2003] “Somalia: Can a Collapsed State Reconstitute Itself?” in Rotberg ed. [2003] *State Failure and State Weakness*, pp.129-158.
Cornwell, Richard [2004] *Somalia: Fourteenth Time Lucky?*, ISS Paper 87, Johannesburg: Institute for Security Studies.
—— [2005] “Somalia: Plus ça change?” *African Security Review*, 13 (4) , pp.57-60.
Doornbos, Martin [2002a] “Somalia: Alternative Scenarios for Political Reconstruction,” *African Affairs*, 101, pp.93-107.
—— [2002b] “State Collapse and Fresh Starts: Some Critical Reflections,” *Development and Change*, 33 (5) , pp.797-815.
Drysdale, John [1994] *Whatever Happened to Somalia?*. London: Haan Publishing.
Dualeh, Hussein Ali [1994] *From Barre to Aideed: Somalia: Agony of Nation*. Nairobi: Stellagraphics.
Duyvesteyn, Isabelle [2005] *Clausewitz and African War: Politics and Strategy in Liberia and Somalia*. London: Routledge.
Economist Intelligence Unit [2004a] *Somalia: Country Profile*. London: Economist Intelligence Unit.
—— [2004b] *Somalia: Country Report August 2004*, London: Economist Intelligence Unit.
Farah Ahmed Yusuf [1994] *The Milk of the Boswellia Forests: Frankincense Production among the Pastoral Somali*, EPOS, Research Program on Environmental Policy and Society, Department of Social and Economic Geography, Uppsala University.
Hashim, Alice Bettis [1997] *The Fallen State: Dissonance, Dictatorship and Death in Somalia*. Lanham, MD: University Pres of America.
—— [2004] “Globalisation and Africa: Reconstructing the Failed Somali State and Reviving National Identity,” in Asafa Jalata ed., *State Crises, Globalisation and National Movements in North-East Africa*. London: Routledge, pp.182-201.
Hill, Jonathan [2005] “Beyond the Other: A Postcolonial Critique of the Failed State,” *African Identity* , 3 (2) , pp.139-154.
Issa-Salwe, Abdisalam M. [1996] *The Collapse of the Somali State*, London: Haan Publisher.

- Jackson, R. H. [1990] *Quasi-states: Sovereignty, International Relations and the Third World*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Jackson, R. H. and Carl G. Rosberg [1982] *Personal Rule in Black Africa: Prince, Autocrat, Prophet, Tyrant*. Berkeley: University of California Press.
- Laitin, David [1976] "The Political Economy of Military Rule in Somalia," *Journal of Modern African Studies*, 14 (3) , pp.449-468.
- [1979] "The War in the Ogaden: Implications for Siyaad's Role in Somali History," *Journal of Modern African Studies*, 17 (1) , pp.95-115.
- Lewis, I.M. [1961] *A Pastoral Democracy: A Study of Pastoralism and Politics among the Northern Somali of the Horn of Africa*, Oxford: Oxford University Press.
- [1963] "Pan-Africanism and Pan-Somalism," *Journal of Modern African Studies*, 1 (2) , pp.147-161.
- [1972] "The Politics of the 1969 Somali Coup," *Journal of Modern African Studies*, 10 (3) , pp.383-408.
- [1989] "The Ogaden and the Fragility of Somali Segmentary Nationalism," *African Affairs*, 88 (353) , pp.573-580.
- [1994] *Blood and Bone: the Call of Kinship in Somali Society*. Lawrenceville, N.J.: Red Sea Press.
- [1998] *Saints and Somalis: Popular Islam in a Clan-Based Society*. Lawrenceville, N.J.: Red Sea Press.
- [2002] *A Modern History of the Somali*. London: James Currey.
- Little, Peter D. [2003] *Somalia: Economy without State*. Bloomington: Indiana University Press.
- Luling, Virginia [1997] "Come back Somalia? Questioning a Collapsed State", *Third World Quarterly*, 10 (2) , pp.287-302.
- Lyons, Terrence, and Ahmed I. Samatar [1995] *Somalia: State Collapse, Multilateral Intervention, and Strategies for Political Reconstruction*. Washington, D.C.: Brookings Institution.
- Menkhaus, Ken [2004] *Somalia: State Collapse and the Threat of Terrorism*, Adelphi Paper 364. London: International Institute for Strategic Studies.
- Menkhaus, Ken, and Charles Kegley, Jr. [1988] "The Complaint Foreign Policy of the Defendant State Revisited: Empirical Linkages and Lessons from the Case of Somalia," *Comparative Political Studies*, 21 (3) , pp.315-346.
- Milliken, Jennifer ed. [2003] *State Failure, Collapse and Reconstruction*. Oxford: Blackwell Publishing.
- Mukhtar, Mohamed Haji [2003] *Historical Dictionary of Somalia, New edition*. Lanham, MD: Scarecrow.
- Novati, Giampaolo Colchi [1994] "Italy in the Triangle of the Horn: Too Many Corners for a Half Power," *Journal of Modern African Studies*, 32 (3) , pp.369-385.
- Ododa, Harry [1985] "Somali's Domestic Politics and Foreign Relations since the Ogaden War of 1977-78," *Middle Eastern Studies*, 21 (3) , pp.285-297.
- Payton, Gary D. [1980] "The Somali Coup of 1969: the Case for Soviet Complicity," *Journal of Modern African Studies*, 18 (3) , pp.493-508.
- Rotberg, R. I. ed. [2003] *State Failure and State Weakness in a Time of Terror*, Washington D.C.: Brookings Institution Press.
- ed. [2004] *When States Fail: Causes and Consequences*. Princeton: Princeton University Press.
- Samatar, Abdi Ismail [1989] *The State and Rural Transformation in Northern Somalia, 1884-1986*.

- Madison: University of Wisconsin Press.
- [1992] “Deconstruction of State and Society in Somalia: beyond the Tribal Convention,” *Journal of Modern African Studies*, 30 (4) , pp.625-641.
- Samatar, Abdi Ismail, and Ahmed. I. Samatar [1987] “The Material Roots of the Suspended African State: Arguments from Somalia,” *Journal of Modern African Studies*, 25 (4) , pp.669-690.
- Samatar, Ahmed I [1988] *Socialist Somalia: Rhetoric and Reality*. London: Zed.
- Schraeder, Peter J. [1986] “Involuntary Migration in Somalia: the Politics of Resettlement,” *Journal of Modern African Studies*, 24 (4) , pp.641-662.
- Sheik-Abdi, Abdi [1977] “Somali Nationalism: Its Origin and Future,” *Journal of Modern African Studies*, 15 (4) , pp.657-665.
- [1981] “Ideology and Leadership in Somalia,” *Journal of Modern African Studies*, 19 (1) , pp.163-172.
- Tripodi, Paolo [1999] *The Colonial Legacy in Somalia: Rome and Mogadishu: From Colonial Administration to Operation Restore Hope*. London: Macmillan.
- Zartman, I. William ed. [1995] *Collapsed States: The Disintegration and Restoration of Legitimate Authority*. Boulder: Lynne Rienner.

表1 ソマリア略年表（本報告で取り上げている時期）

年	月日	事項
1959	3月4日	信託統治下のソマリアで総選挙。主要派等は選挙をボイコットしたこともありソマリ青年連盟（Somali Youth League: SYL）が90議席中82議席を獲得
1960	2月	イギリス領ソマリランドで初の総選挙実施。33議席中ソマリランド民族連盟（Somaliland National League: SNL）が20議席、統一ソマリア党（United Somali Party: USP）が12議席民族統一戦線（National United Front: NUF）・SYL連合が1議席それぞれ獲得
	4月6日	英領ソマリランドの立法評議会において、独立と1960年7月1日付の信託統治領ソマリアとの合併に向けた決議採択
	4月12日	ソマリア国軍創設される
	4月22日	信託統治領ソマリアと英領ソマリランドの統合が宣言される。双方の指導者間が4月16日から22日までモガディシュで会合を開き、1960年7月1日に統合することが合意される
	6月26日	英領ソマリランドがソマリランドとして独立
	6月30日	6月30日夜12時に（信託統治領の）暫定大統領アダン・アブドル・オスマン（Adan Abdulle Osman）がソマリア共和国の独立を宣言
	7月1日	ソマリランドとソマリアの立法協議会それぞれからの代議士それぞれ33名と90名が出席し、国民議会が形成された。ここでオスマンがソマリア共和国の大統領代行に選出された
	7月7日	ソマリランド出身のジャマ・アブラーヒ・ガリーブ（Jama Abdullahi Ghalib）が国民議会の議長に就任
	7月22日	オスマン大統領がアブディラシード・アリ・シェルマルケ（Abdirashid Ali Shermarke）を首相に任命
1961	6月2日	ソマリア政府がソ連との間で経済協力、文化交流に関する協定を締結。この協定の下で、ソ連は農業開発のために4000万ルーブルの無償資金を提供。このほか、ソ連は病院を2棟、学校、印刷所、放送局を建設
	6月20日	ソマリア共和国の憲法案が国民投票にかけられる。賛成176万票あまり、反対8万票余り
	7月6日	国民議会はオスマンを大統領に選出（任期6年）
	7月11日	シェーマルケ首相が新政府設立
	10月16日	オスマン大統領ガーナを始めて訪れる
	11月1日	アメリカ合衆国がキスマコ港建設に合意
	12月	ハルゲイサの軍将校によるクーデタ未遂
1962	6月18日	ガリーブ国民議会議長率いる議員団が、ケニアの独立を前に、ケニアの北東部州（Northern Frontier District: NFD）の地位を議論するために英国訪問
	6月15日 ~8月11日	ケニアの主要政党の代表（ケニヤッタ、オディンガ・オギンガラ）がNFDの地位をソマリアと検証する目的で訪問
1863	3月12日	英国との外交関係断絶。英国調査委員会の報告でNDF地域の62%がソマリ

		アとの合併を希望しているにもかかわらず、NFD の地位はケニア独立まで定められないという結論に対抗するもの
	5 月	シェーク・アリ・ジャマール・バラール (Sheikh Ali Jamale Baraale) が新政党ソマリ国民会議 (Somali National Congress: SNC) を創設
	5 月 23 日	OAU 憲章調印のためオスマン大統領一行アジス・アベバへ
	6 月	ソマリア憲法 29 条が非イスラムへの回収を禁じる形に修整
	11 月	独立・合併後最初の地方選挙実施。SYL が 904 議席中 665 議席獲得。SNC が 105 議席。他は泡沫政党へ
1964	2 月	OAU 閣僚会議 (ダルエスサラーム) にて、ソマリアとエチオピア間の国境をめぐる敵対関係の解消を求める決議採択
	3 月 30 日	ソマリア・エチオピア間の停戦合意 (ハルソーム合意)
		独立・統合後初の総選挙。123 議席中 SYL が 69 議席、SNC が 22 議席、ソマリ民主連合 (Somali Democratic Union: SDU) が 15 議席、ソマリ独立憲政党 (Hizbiya Dastur Mustaqbil Al-sumal: HDMS) が 9 議席、その他 8 議席
	6 月 7 日	オスマン大統領がアブディラザック・ハジ・フセイン (Abdirazak Haji Hussein) を首相に指名。
	7 月 3 日	フセイン政府、議会での信任を得られず
	8 月 6 日	オスマン大統領が再度フセインに新政府樹立を要請
	9 月 28 日	フセイン政府議会の信任獲得
	11 月 12 日	世銀がモガディシュ空港建設に資金提供
	11 月 18 日	SYL でフセイン首相を党書記局長 (Secretary-General) に選出
	12 月 27 日	第 6 回世界ムスリム会議モガディシュで開催。ケニア、エチオピア、ジブチのソマリア人居住地域の独立支持
1965	2 月 2 日	フセイン首相「適材適所」の原則に基づき、公務員全員に 1 年間の実習期間を設定
	6 月 24 日	モハメド・シアド・パーレ准将ソマリア陸軍司令官に
	6 月 28 日	初等教育における指導の際に暫定的の用いる言語としてアラビア語と英語を指定 (ソマリア語の公式な表記の選定は延期)
	8 月 4 日	1964 年のハルソーム合意違反でソマリア・エチオピア双方が非難
	9 月 2 日	OAU 事務総長ディアロ・テリ (Diallo Telli) がソマリア・エチオピア危機打開のためモガディシュ訪問
	12 月 14 日	ケニア、ソマリア双方の大統領・外務大臣がアルーシャ (タンザニア) で会合。ケニアの NFD の地位に関する問題で協議
1966	2 月 6 日	国民議会議長アーメド・シェイク・モハメド・アブシエ (Ahmed Sheikh Mohamed Absiye) が SYL から除名
	3 月 8 日	シェーク・ムクター・モハメド・フセイン (Sheikh Mukhtar Mohamed Hussein) が国民議会議長に選出
	10 月 25 日	シャベル石油会社 (クウェートの王族と西テキサスの石油業者の合併事業体) が 6 年間の石油採掘権調印
	12 月 17 日	フセイン首相 20 日に及ぶ国内視察。自助の必要を説く

1967	3月18日	フランス領ソマリランドでの住民投票に際し、ソマリア、エチオピア両国が国境に軍を配備。フランスは国境封鎖
	3月20日	ジブチはフランス領内にとどまる結果
	6月	シェーマルケ前首相が大統領に選出
	8月14日	外務大臣アーメド・ユスフ・ドアラ（Ahmed Yusuf Dualeh）と情報相職員が諜報活動を行った罪で逮捕・勾留
	9月20 ～23日	サウジアラビアのファイサル国王国賓として訪問。親アラブ・親イスラムの姿勢を示す
1968	9月5日	モハメド・ハジ・イブラヒム・イーガル（Mohamed Haji Egal）首相が首相としてはじめてアジス・アベバを訪問。国境の非軍事化に合意したほか、モガディシュ・ハルゲイサ路線の再開、商業放送・通信面での協力で合意
	12月13日	ソマリア政府がウランの採掘権を祖末練という西側の企業グループに供与
1969	3月	2回目の総選挙。123議席中SYL73議席、SNC11議席、HDMS3議席でその他の泡沫政党が36議席。65を超える政党が乱立。ただし、選出された議員は1名を除きSYLに合流
	10月15日	シェーマルケ大統領暗殺
	10月21日	シアド・バーレ少将率いる軍事クーデタにより、ソマリ革命評議会（Somali Revolutionary Congress: SRC）政権が成立
1970	5月7日	主要なソマリア、ならびに外国企業と銀行の国有化
	10月21日	SRCが「科学的社会主義」を統治の方針として打ち出す
1971	5月	シアド・バーレ暗殺失敗、クーデタ未遂。裁判の結果、モハメド・アイナンシェ（Mohamed Ainanshe）少将、サラード・ガビール・ケディエ（Salad Gabeere Kedie）中佐、アブドルルカディー・ディヒール（Abdulkadir Dheel）大佐処刑
1972	2月	ソ連からの軍事支援合意。軍事物資の提供、親空軍基地建設、ベルベラ港の改良工事等を含む。また1500名の軍事顧問の派遣も合意
	10月21日	ソマリ語であるアフ・マハー（Af-Mahaa）の標準ラテン筆記体採用
1973	4月	オスマン大統領、フセイン首相他文民政治家釈放
	5月	OAUにてオガデンでの対立を仲裁する委員会設立
1974	2月16日	ソマリアがアラブ連盟に加盟
	7月	農村開発キャンペーン開始
	7月11日	ソマリア・ソ連友好・協力条約締結。ミグ21戦闘機、T-54戦車、SAM-2ミサイル防衛システム等供与。また軍事顧問数3000人に増員
	8月	ソマリアの8つの行政地域が分割され15に増加
	11月29日	北部地域の旱魃対応の全国旱魃救援委員会設立
1975	1月11日	シアド・バーレ大統領が女性に同等の相続権を認める新民法を公布
	1月23日	10名のシェーク（敬虔なイスラム教徒、僧侶）が宗教的理由で新民法に反対し処刑される
	2月	最初の国勢調査。372万人
1976	6月26日	ソマリア革命社会主義党（Somali Revolutionary Socialist Party: SRSP）が

		設立され、シアド・バーレが党書記局長に選出。
1977	6月27日	ジブチ共和国独立
	8月	ソマリア正規軍3万5千と西ソマリア解放軍(Western Somali Liberation Front: WSLF)民兵1万5千がエチオピアに侵攻し、オガデン地方の係争地ほぼ全土を占領
	11月13日	ソマリアが1974年のソ連との友好・協力条約破棄、またソ連からの軍事顧問の国外退去を命令。600名のソマリア人仕官訓練生がソ連から強制的送還
1978	3月	ソマリアはエチオピア・ソ連・キューバ軍の進軍により敗走。多数の難民の流入を招く
	4月9日	クーデタ未遂と17人の将校処刑
1979	2月	マジャーティーンを支持基盤とする反政府勢力ソマリア救国民主戦線(Somali Salvation Democratic Front: SSDF)設立
	8月29日	ソマリア第二憲法が特別選挙で信任される
	12月30日	初めての一党体制下の選挙
1980	8月	ソマリアとアメリカの間で、アメリカのベルベラ港とベルベラ空軍基地の軍事使用を認めることが合意される。アメリカは5300万ドルの経済援助と4000万ドルの軍事援助を供与
1981	4月	イサックを支持基盤とする反政府勢力ソマリア国民運動(Somali National Movement: SNM)設立
	8月	イエメンで、リビア、イエメン、エチオピアの間の友好協力条約締結
1982	6月9日	イスマル・アリ・アバコー副大統領、オスマン・ジェレ人民議会副議長、複数の閣僚を含み7名の政治家を逮捕・勾留
1983	3月19日	ソマリアでチャット(覚醒作用を持つ薬)を禁止
1986	5月	シアド・バーレ大統領が交通事故。サウジアラビアで長期療養
1988	4月	エチオピアと和平条約調印。オガデン地方への要求放棄
	6月	シアド・バーレ体制に反対する拠点都市、北部のハルゲイサとブラオをソマリア軍が攻撃。30万人にイサックがエチオピア国内に難民として流出
1989	1月12日	ハウィエを支持基盤とする反政府勢力統一ソマリア会議(United Somali Congress: USC)
	4月22日	ラハンウィンを支持基盤とする反政府運動ソマリア民主運動(Somali Democratic Movement: SDM)結成
	7月9日	カトリックのコロンボ・モンシニョル(カトリック教会の司祭)がモガディシュの大聖堂で殺害される
	7月16日	ゲジラ・ビーチでの虐殺
1990	5月15日	114名の宗教、ビジネス、政治指導者(マニフェスト・グループ)がシアド・バーレ大統領の辞任と暫定政府を設立するための国民和解会議の開催を求める要求を提出
1991	1月5日	モガディシュが戦渦に。アメリカ他大使館員が軍用ヘリで救出。
	1月27日	シアド・バーレがモガディシュからエチオピア・ケニア国境近くのゲドへ逃亡

	1月29日	USC アリ・マフディ・モハメド (Ali Mahdi Mohamed) を暫定大統領に任命するも失敗
	5月18日	イサックを支持基盤とする SNM が「ソマリランド共和国」の独立を宣言
	9月	シアード・バーレの民兵がバイドアを攻略。この後飢餓が蔓延。
	11月17日	モハメド・ファラー・アイディード (Mohamed Farah Aided) とアリ・マフディ・モハメド 暫定大統領の間で戦闘勃発 (モガディシュ)。先頭は5ヶ月に及びモガディシュは事実上南北に分断
1992	5月	シアード・バーレの民兵がモガディシュの獲得を試みるものの、バリドグレでソマリア解放軍 (Somali Liberation Army: SLA) に敗れる
1995	1月2日	シアード・バーレがナイジェリアのラゴスで死去。公式の生誕地であるゲド州ガーバハレに埋葬

(出典) Mukhtar [2003] などより筆者作成。

表2 「議会制期」の主要政党

政党名	主要氏族構成	追加説明
ソマリ国民会議 (Somali National Congress: SNC)	イサック、ハウィヤ、ディル	1963年にイサック主導のSNL、ダロッド主導のSYL、ディル主導のUSPの氏族連合の失敗に伴い形成。SNL、SYLからの離反者により結成。モハメド・ハジ・イブラヒム・イーガルとアブラシード・アリ・シエルマルケによる政権連合。ダロッド主導のSYLに対抗的。
ソマリ民主連合 (Somali Democratic Union: SDU)	イサック、ハウィヤ (設立当初にはダロッドが主導的)	氏族連合の失敗に伴い1962年にSYLからの追放者で形成された、ダロッド、ハウィヤを含んでいた大ソマリ連盟 (GSL) からのさらなる離反者によって設立。革命指向的。
ソマリ青年連盟 (Somali Youth League: SYL)	ダロッド、ハウィヤ	1943年に創設されたソマリアで最初の政党
ソマリ独立憲政党 (Hizbiya Dastur Mustaquil Al-sumal: HDMS, Somali Independent Constitutional Party)	ディギル、ラハンウイン	ジュバ川とシャベル川にはさまれた河川間地域 (Inter-riverine Region) 居住氏族を中心に設立された政党。その起源はイタリアによる占領が完了した1920年代に遡るが、1947年5月に政党となり、1957年に政党名を変更した。

(出典) Hashim [1997] Mukhtar [2003] などより筆者作成。

表3 ソマリアにおける主要氏族による政府構成*

	1960	1966	1967	1969	1975
ダロッド	6	6	6	6	10
ハウィヤ	4	3	4	5	4
ディギル、ラハンウイン	2	3	3	2	0
ディル	0	1	1	0	2
イサック	2	3	4	5	4
合計	14	16	18	18	20

(注) ここで「政府」は閣僚を指す、1969年以降はSRCメンバー。

(出典) Lewis [2002: 221]

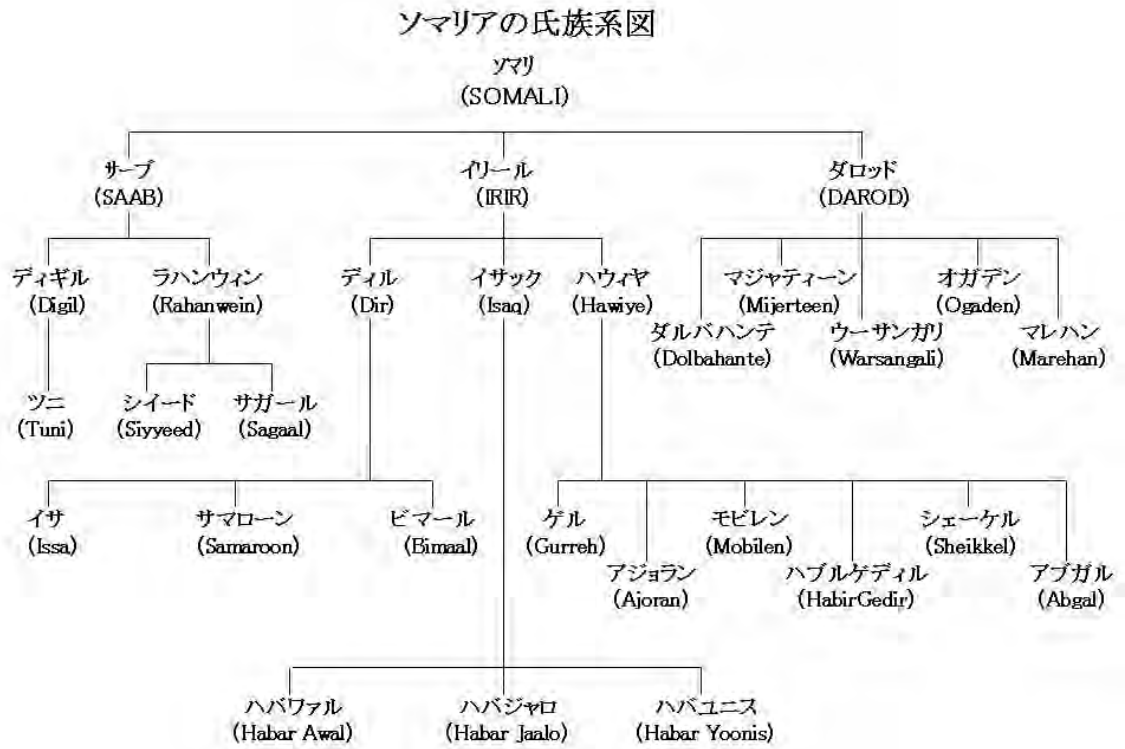
表4 1978年以降（～1991年）の準軍事政治組織（para-military political party）

政党名	主要氏族	追加説明
ソマリア救国民主戦線（Somali Salvation Democratic Front: SSDF）	マジャーティーン	オガデン戦争後、エチオピアに国外逃亡したマジャーティーンにより1979年に設立。1981年には他のマジャーティーン・グループと結合。リビアやエチオピアのメンギスツ政権からの軍事支援を受ける。イサクなど他の氏族を積極的に取り込む姿勢を見せた。1980年代末にはシアド・バーレのソマリア軍に敗北。1990年代の内戦下でその勢力を失うも、プントランドの自治の必要性を主張している。
ソマリア国民運動（Somali National Movement: SNM）	イサク	1981年4月にロンドン在住のイサクのグループによりシアド・バーレ体制に抵抗する勢力として設立された。1982年にはエチオピアからの軍事攻撃を開始。1984年にはSSDFなどとの共闘を開始。1980年代後半には特に北部で政府軍と激しく交戦。1988年から89年には南部のハウイヤ主導のUSC、オガデン主導のSPMと連携強化。1991年軍事進攻を続けたもののUSC主導の暫定政府は承認しなかったほか、北部での「ソマリランド共和国」の「独立」を宣言。
ソマリア愛国運動（Somali Patriotic Movement: SPM）	オガデン、ダルバハンテ	1988年アーメド・オマー・ジェスによって設立されたオガデン主導の反シアド・バーレ勢力。
ソマリア民主運動（Somali Democratic Movement: SDM）	ディギル、ラハンウィン	1989年4月にアラブ首長国連邦のドバイで河川間地域の農民保護の目的で設立された反シアド・バーレ組織。連邦制と自治を主張。ダロッドでない氏族グループとの協力を模索するが、イサクのSNMとの協力関係形成には失敗。1990年にUSCとの連合の元シアド・バーレ体制を打倒。しかし、その後USCとの戦闘に至り、河川間地域のインフラなどが破壊される。SDMはその後分裂し、三派に分かれるがソマリアにおける和解に積極的に取り組む姿勢

<p>統一ソマリア会議 (United Somali Congress: USC) ハウイヤ</p>	<p>を見せている。</p> <p>1989年にハウイヤのディアスポラによりローマで結成された。ハウイヤのみの排他的な組織であったが、民主的制度の回復や国家の再興を目指した。初代の指導者の死去に伴い、指導部に深刻な危機に直面したが、1990年にモハメド・ファラー・アイディードを指導者に選出。1990年12月から翌91年1月にUSCの民兵はモガディシユで激しい戦闘を行い、軍・警察の本部を占拠したほか、大統領府にも進攻し、シアド・バーレを追放。USCは1月27日に勝利を宣言したほか、「マニフェスト・グループ」との協力の下で暫定大統領としてアリ・マフディ・モハメドを提案するもののアイディードはそれに反対し、戦闘を激化させる。その後USCのアイディード派はオガデンのソマリア愛国運動 (Somali Patriotic Front: SPF)、ディギルのソマリア民主運動 (Somali Democratic Movement: SDM) からの離反グループとともにソマリア解放軍 (Somali Liberation Army: SLA) を形成し、シアド・バーレを最終的に打ち破る。1992年7月にはSNMの一部グループも吸収しSNAを設立。</p>
<p>ソマリア国民連合 (Somali National Alliance: SNA) 氏族横断的</p>	<p>1991年8月にUSCから分裂する形でUSCを率いていたモハメド・ファラー・アイディードにより設立。他のグループからの離反グループを糾合し、国連に敵対姿勢をとったほか、1993年のアジス・アベバ平和協定で定められた武将解除も拒否。</p>

(出典) Hashim [1997]、Mukhtar [2003] などより筆者作成。

図1



(出典) Lyon and Samatar [1995: 9] より作成。